

東西思想出合いの場を自己のうちに拓く I

授業科目名	東西思想出合いの場を自己のうちに拓く I	単位数 4 単位
英語標記	Philosophy of Encounter	
授業コード	360305	
受講人数	10 人	
担当教員	小林 恭	
対象	全研究科大学院生、3 年次以上の全学部生	
開講時間等	通年＝火曜 3 限（4 月 13 日～）	
開講場所	箕面キャンパス：外国語学部 講義室 A614	
キーワード	スピリチュアリティの人間学的意味、自己との出合い、他との出合い。	
授業の目的	第 1 学期には、西洋思想の伝統をふまえ現代的意義も大きいと思われる代表的な思想家のものを、第 2 学期には、東洋思想の伝統のなかから同様の意義ある思想家のものをとりあげ、ともに短いながら読みやすかつ歴史的重要性をもつ著作を一点ずつテキストとしてとりあげテキストの一字一句に注意をはらうことによって自己自身についてかえりみる力を訓練する。各自の主体においてそのコントラストを味わい確かめてもらいたい。思想と思想との出合い、異文化との出合いは、まず自己のうちに於いてその共生と対立の場がひらかれなければならないからである。 ※旧大阪外国語大学の授業科目「比較思想論 III」と合同で開講される。	
講義内容	今年度の授業テーマは、「アランの人間学から臨済の思想へ」である。 第 1 学期は、デカルトの情念論の独自の解釈を中核にもつアランの人間学と、そこから展開された教育思想、宗教思想を学び、各自が自分の専攻において取り組んでいる問題を考える場合の哲学的情念論の射程をたしかめる。 第 2 学期は、アランの思想の根源と禅仏教とに通底する地点の探求により、現代にふさわしい人間観のひとつの可能性をさぐる。次のような語句がキーワードとなろう。「一無位の真人、途中と家舍、真正の見解、心心不異、無事、信不及、自由、不受人惑、業、現代における宗教性と人間観の問題」。	
教科書	（第 1 学期）『情念論』『教育論』『神々』『人間論』『文学論』等からプリントで配布。 （第 2 学期）岩波文庫『臨済録』入谷義高校注	
参考書	前田利鎌『臨済・荘子』（岩波文庫）、鈴木大拙『臨済の基本思想』など。その他授業中に紹介する。	
成績評価	平常点と適宜の課題。	

「共生」をうたう「争生」の時代

近年、共生という言葉が、自然環境・文化・経済・社会福祉等、多方面の領域を横断して脚光を浴びてきた。この関心の高まりは、いかにも非「共生」的な諸現象が顕著に意識されるようになった時代的背景を反映しているであろう。家庭内や学校における世代間の不信と葛藤から、ジェンダー間の相克、人種間差別、障害者や特定の罹病者への偏見、諸宗教の対立、政治的イデオロギーによる抗争、そして地球自然環境と人類との不調和に至るまで、共生(living together)どころか争生(living in battle)とでも呼ぶべき荒廃現象の噴出である。

この事態は、世界中が一つのシステムとして一体化し、一人一人の人間の存在がその中で限りなく拡散してゆきながら、その拡散が世界的なつながりであるかのごとく思われて、実際は文化の内実が喪失されてゆく、という現代のとどめがたい趨勢と比例しているようにみえる。

「内発的に変化してゆくが好かろう」

あらゆるものが結びつけられたシステムとして、世界が一つになる在り方そのものが、かえって対立を激しくしているのが現状である。世界を計る原理が、経済効率的なものに単一化して競争は激化し、同時に、単一原理によって覆われてしまった文化の異質性は野性的な力で噴出し、民族紛争などは激しくなる。そこでどうすればよいのか。

「漱石ならば現在の窮状のなかで、明治四十四年のこの言葉を繰り返すだろうと思います。ただ、より悲観的に、ますます名案なく、それだけにより真実味をこめて、『内発的に変化してゆくが好かろう』と繰り返すだろうと思います。そこには、どうにもならないということと、それにもかかわらず、道があるとすればここにしかないという、より切迫した響きがこめられてくるでしょう。」「この道は最後まで残ると思います。ですから、もしまだ道があるとすれば、個人が自覚して自分で内から変わっていくことだと思います。それを否定すれば、おそらくもう道はなくなるでしょう。」と上田閑照は残された道の可能性を表現している。

内発的变化から真の共生へ

他の文化的伝統に対して開かれた敬意をもって接することができるためには、先ずその対話が自己の内部ではじめられ、私たち一人ひとりが内なる平和を実現することなくしては、他者や世界との平和的關係は実現できないであろう。この授業は、異なる伝統を各自が主体的に学ぶことをつうじて、先ず自己における内発的変化と成熟を期するものである。